



地震の話

～酒井明 説話集 35※～

『宿毛市史』にも出ているが、こちら辺をおそった大きな地震は度々ある。あらかし、100年くらいの間隔で起るというてもよい。

亥の大変（1707年）、寅の大変（1854年）、南海大地震（1946年）、そのあいだにも色々あるが、今でも、南海大地震は体験した人もおられるが、寅の大変に比べると、まだまだ小さかった様である。

亥の大変、これは又大地震と大津波だったらしい。しかし、寅の大変もなかなかのものだったという話だ。

江戸末期、嘉永7年11月5日（寅の大変）。夕日が西に傾きかけた頃、突然襲ってきた大地震。山に薪をこしらえに行った人は、立っていられず切株にすがって座っているのがようようだった。木の間をすり抜けながら、枝先をついついと移り飛んでいた小鳥も、下に落ちるのを見たという話もある。

一夜明けて周囲を見わたすと、緑のものいうたら松だけで、ほとんど草木が枯れ伏して、山のそこかしこから、吹き出す山潮、その水は、潮を含んで辛かったという。沖からの津波で、ずい分やられたらしい。

年寄りが、「おばあさんから聞いた。」という話しの書き物はないかもしれんが、残っている。

南海大地震の津波は、宿毛の町は、野にする程は来なかったが、西のほうの山の上から、青い光が走ったり、堤防が壊れて潮水が今の警察署の所まで押し寄せたりで、家が倒れたり、火事もおこった。

被害は相当ふとかったが、潮水がどこまで押し寄せたなんぞを、記録したものは、ないのではなからうか。

寅の大変の言い伝えは、作物なんかもやられて、そうとう不自由したという。今は食べ物を運んで来るすべはあるが、昔はそうはいかなかったから、ずい人々が苦しんだことであろう。

言い伝えでも結構だから、こういう話も今に残していきたいものである。

天変地異というものは、いつ起るか判らない。

いつどんなことが起っても、慌てることのないよう十分な備えをし、そんな話を現代に受け継いでいかななくてはと思う。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。
ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。